

ながさき異聞

ブライアン・バークガフニ

57

鎖国時代は南蛮時代と同様、長崎を訪れる外国人はほとんど男性だけだった。彼らは、出島と唐人屋敷から自由に出られなかったが、丸山遊郭から派遣される遊女たちとの交際が許された。その間に生まれた子供たちの大半は日本人社会に吸収されたが、歴史に名を残した人物もいる。ドイツ人医師シーボルトの娘である楠本イネ（おイネさん）や出島オランダ商館長ドゥーフと遊女、瓜生野との間に生まれた道富文吉が好例で

ある。

安政開港後、外国人訪問者の波が長崎に押し寄せ、それに比例して外国人男性と日本人女性の出会いが増えた。日本政府は明治6（1873）年について国際結婚を許可するようになったが、興味深いことに、これはキリスト教禁止の

大泉黒石をしのぶ



大泉黒石（1863～1957年）

精彩に富んだ描写残す

高札が撤廃されたのと同じ年である。

居留地時代にも多くの混血児が生まれた。外国人親族の名前と国籍をとり、やがて日本を離れるケースがあつた一方、トーマス・グラーバーの息子倉場富二郎やロバート・N・ウォーカー船長の次男ロバート・ウォーカー二世のよう

（1919）年、中央公論誌に小説「俺の自叙伝」を連載すると、

一躍、全国的な脚光を浴びることとなった。その後、彼は「老子」や「人間廃業」など次々とベストセラーを世に送り、名作「おらんださん」や「黄（ウォン）夫人の手」などには、長崎の情景について精彩に富んだ描写を残した。しかし、その栄光も長くは続かず、昭和10年代の日本を取り巻く不寛容で排他的な情勢の中で苦難に直面した。

大泉黒石が残した次の一句に

明治26（1893）年、長崎市八幡町で日本人女性とロシア人男性との間に生まれた大泉黒石（本名・清）は後者の一人である。

彼は、父親不在のまま波乱に満ちた少年時代を過ごしたが、大正8

彼は、父親不在のまま波乱に満ちた少年時代を過ごしたが、大正8

「嫌はれて 花になりけり 野芹かな」である。

（長崎総合科学大教授）